

〔倭訓菜前編四十四〕ゑんすい 五節或は正月にいへり、淵醉と書り。

〔おもひのまゝの日記〕けふ〇正月二日は又殿上の淵醉とてひしめく、えいきよくの人々、數をつくして廿人ばかりさぶらふ、かみのとにて御覽あり、すそかづきの女房卅人ばかり、御あたりにさぶらふ、きぬの色々花びらをちらしたる心地して、いとめもあやなり、五節のをりにもおとらず、御かたぐのすいさん、酔すごしたる殿上人など、度々袖うちふるけしき、心ざまにておもしろし、

〔蓬萊抄〕正月二日殿上淵醉 或用三日

兩貫首已下、於殿上有盃酌事、絃管屬文之隨其催獻朗詠雜藝等無定法、或以祖楊天下無爲之時有此事、

〔建武年中行事〕三日〇正月、殿上の淵醉あり、藏人頭已下ことにたへたる男共だいばんにつく、六位藏人獻盃す、朗詠二首、今様一首、三獻のたび、ぎよくらうの藏人獻盃すれば、頭、殊更これを乞ひ、賞翫してひもをはづす、此時みなかたぬぐ、今様の後亂舞に及ぶ、皆座ながらまふ、六位こいたじきにてはやす、藏人頭三反なり、御いしの前に進みてまふこともあり、主上はしとみより御覽す、女房など數多障子の邊にさぶらふ、事はて、中宮にすいさんす、そのぎ同じ、但公卿の座にて先けんばい、ふだの衆これを進るなり、

〔中右記〕寛治八年正月二日乙亥、今夜及深更兩貫首以下著殿上、有淵醉事、朗詠今様之後、已及散樂、三獻、一觴、左衛門尉永實饗應無極、施種々遊間及夜半、感歎之至、誠勝前々、

〔永昌記〕長治二年正月三日壬申、參大内可有殿上淵醉、而頭辨遲參、入夜事始、三獻朗詠了後、各以分散、